

○北澤 京子¹

¹日経BP社

一人ひとりの患者にとって、薬の Treat（治療による効果）をなるべく大きく、一方で Harm（治療による害）はなるべく小さくするため、以下の4点を挙げたいと思います。

正しい薬を届ける：当たり前のことですが、目的に合った正しい薬を患者の手元に確実に届けること。名称や外観の類似による取り違えミスや、用量を間違えるミスを減らすこと。後発医薬品の普及に伴い、先発医薬品ばかりでなく、後発医薬品への対応も求められます。

薬は情報とセットで届ける：薬の種類が増え、内容も複雑になってくると、口頭だけでなく、文字（文書）による情報もあると助かります。既存の情報源（医療者向け、患者向け）の活用もさることながら、医療現場での工夫が期待されます。さらに、情報を患者にどう伝えるかが大問題です。

情報の質を高める：情報があっても、中身が貧弱であれば役に立ちません。「存在するのに検出されていない」情報をできる限り減らすこと。特に Harm に関しては、治験段階はもちろんのこと、より多くの患者に薬が使用される市販後も、継続的な情報収集努力が求められると思います。

個別化医療を推進する：患者が知りたいのは「（他のだれでもない）私にとって、この薬は飲む価値があるのか」ということだと思います。ファーマコゲノミクスや薬物動態に関する知見が蓄積し、個別化医療が進むことにより、薬の安全が高まることが期待されます。